



私の棺桶



私はお葬式を予約した。

まず電話をかけるところから、少し失敗した。

『はい、こちら篠原葬儀屋です。担当の空井月乃と申します。お電話ありがとうございます』

「もしもし、あの、お葬式の予約を取りたいんですが」

『……』

電話の向こうで、息を呑む気配がした。お葬式の予約として何か間違ったことを言ったのだろうか。いや、間違っているはずがない。私は普通にお葬式を開くだけだ。

『はい。失礼ですが、喪主様のお名前を窺ってもよろしいでしょうか』

「は、はい。喪主は芹沢邦広と申します」

当然、私は私の名前を言った。私が喪主を務めなくてどうする。

『では、故人のお名前もお願いします』

「はい。芹沢邦広と申します」

そこから長い長い沈黙があった。私はともすると電話がもう切れてしまっているのではないかと思っただが、電話口の奥からなにやら相談ごとをしている声が漏れ聞こえて、まだ繋がっているのだと確認できた。しかし、なかなか相手は電話に出てこない。普通にお葬式の予約をするだけなのに、変な葬儀屋だなあ。

電話口の声が変わった。

『大変お待たせいたしました。お電話代わりました、篠原孝司と申します。わかりました。お客様。生前葬のお申込みですね？ 誠に遺憾ながら当社ではこれまで生前葬のサービスを看板に掲げておきながら、申し込まれたお客様は今回、芹沢さまがはじめてでして、』

「違います。生前葬じゃありません」

また長い長い沈黙があった。今度は相談の声がさきほどよりも鮮明に聞こえた。もしかしたら葬儀屋の人は保留ボタンと間違えてスピーカーホンボタンを押してしまったのかもしれない。

『おい。生前葬じゃないって言ってるぞ』

『はあ？ じゃあ、何なのよ。何で自分で自分の葬式を申し込むわけ？』

『わからないから聞いてるんだろうが』

『私にわかるわけないわよ。お客様に聞いたらいいいじゃない』

『だって、幽霊かもしれないじゃん』

『はっ。なんで幽霊が葬式申し込む電話かけてくんのよ』

『で、でも最近、幽霊がよくうろろしていますよ』

『『空井さん、見えるの??』』

まる聴こえなんですけど。私はうおっほんと咳払いをした。スピーカーホン状態になっているのなら私の声もよく聞こえる筈だ。実際、咳払いの後にすぐに葬儀屋の主人は受話器を取った。

『大変お待たせいたしました。もうひとつお伺いしたいことがあります』

「なんでしょう」

『お客様は、なぜ、ご自分の葬儀を予約されるのですか』

「なぜって。いちいち理由が必要なんじゃないか」

『いえ。ご自分の葬儀を予約なさる方はめったにおらず、というより、芹沢さまがはじめてでして。例えば死期が差し迫っていて身辺整理も終えて後は葬式を待つのみという末期のがん患者の方のご予約でしたら、納得はできるのですが。芹沢さまは声をお聞きしたところ、健康に問題はなさそうですし、何よりまだ若いのでは？』

「電話でそれだけわかるんですね。すごいです。私は健康上にほとんど問題はありません。年齢もまだ四捨五入しても三十路なんです。それでも、私は私の葬式を予約する」

この意味が、わかりますか。ええ。私は私を殺すってことです。お葬式を予約した日にね。健康上にほとんど問題は無くても、精神はぼろぼろなんですよ。もう限界なんです。働いても働いても暮らしが楽にならない。それどころか働けば働くほどに私の仕事は増えるのです。わけがわからないよ。このまま私が生きていても私は私じゃない他の誰かを殺すだろう。だったら、その前に自分を殺してしまえばいい。そうしたら、きっと私は他の誰かを殺すことなどない。

葬儀屋は三度目の沈黙ののち、震える声で私に告げた。

『.....わかりました。こちら、駅前の第三ビルの二階にありますので、詳細な打ち合わせをしましょう。ご来店お待ちしております』

「はい、明日にでも伺います」

私は、一仕事終えた気持ちで受話器を置いた。よく晴れた土曜日の昼下がりだった。明日は日曜日。早速私は打ち合わせに行こうと思った。

打ち合わせ

昨日に続いて今日もよく晴れた。駅前の人通りは鬱陶しいくらいだった。人をかき分けて前に進む。インターネットで検索してメモしておいた住所と看板を頼りに私は『篠原葬儀屋』へとたどり着いた。階段で二階へ上がった。心もち緊張しながらドアをノックする。

こんこんこん。

ドアの向こうから葬儀屋に似つかわしくない明るい声が響く。

「は一いっ」

がちやりという音とともに現れたのは、私が今までに見た女の子の中でもいちにを争うくらいに可愛い女の子だった。名前プレートには空井月乃とある。電話で最初に受話器を取った子だと私は気がついた。

「いらっしゃいませえ。ささ、こちらどうぞ。あー。お名前よろしいでしょうか」

「芹沢です。芹沢邦広」

私の名前を告げた時、彼女の完璧な笑顔にひびが入ったような気がした。なんだ所詮は営業スマイルか、などという落胆はしなかった。私は気のせいだと思った。近頃、自分はひがみっぽくなっている。それを自覚してそう思った。

応接間で一分くらい待っていると、空井がコーヒーを出してくれた。

「お砂糖とミルク、置いておきますね。ごゆっくりどうぞ」

「ありがとう」

それから間もなくして葬儀屋の主人、篠原孝司が顔を出した。

「お待たせいたしました。芹沢さま。今回はお葬式のご予約ありがとうございます」

「いえ」

「こちらが料金プランになります。芹沢さまのご自宅で行う葬儀と地域会館などを借りて行う葬儀と、あとはホテルで行う葬儀など芹沢さまのご予算に合わせてお選びいただけます」

私はパンフレットを眺めながら、迷った。どうせ死ぬのだから借金をしまくって一番高いプランを頼めばいい。葬式に来てくれる人が減りそうではあるが、死んだ後の事など知ったことではない。それなのに私の目は一番安いプランから動かない。死ぬ気になっても、私は変わらない。

「じゃあ、この自宅のできるやつで、一番安いので」

変わらないままでいいのか、私。

「いや、やっぱ、こっちのワンランク上のプランをお願いします」

言えた。死ぬ前に一つだけ上のプランを頼むことができた。私は満足して笑顔で篠原孝司を見た。しかし、篠原孝司は一件の葬式の予約が入ったにも関わらず浮かない顔をしていた。このとき私はその原因がなんだかわからなかった。今になって思うのは、この時の私は相当なあほだったということだ。孝司は客の私が目の前にいるというのにため息をついた。

「はあ。芹沢さん。本気なのかい？」

これまで業務用の言葉遣いだった孝司が素で私に問いかけた。私は契約が完了してもう家に帰るモードに入っていたから驚いた。

「ほ、本気って、何がですか」

「何がって、自分で自分の葬儀をやることだよ。生前葬じゃない。本当の葬儀をする。そんなことを聞かされてはいはい黙ってられるか」

「この葬儀屋で受け付けてくれないのならば、他の葬儀屋を探すまでです」

私は驚きつつも冷静に応えた。そういう反応が来ることはあるかもしれないとは思っていた。私の答えを聞いた孝司は、苦虫を噛み潰したような表情をして、

「おい、かーさんっ」

店の奥の方へ向かって叫んだ。応接間にひょこっと顔を出したのは、篠原孝司の妻、篠原千秋だ。名前のプレートにそう書いてある。書類を腕に抱えながら忙しそうだ。

「何よ。昨日は俺一人で説得して見せるって息巻いてたくせに。私を呼ぶのは早いんじゃない？」

「す、すまん。だが、こいつなかなか強敵だぞ」

おい。仮にも私は客なのにどうしてこいつ呼ばわり？

「そんなことでどうするのよ。これからもこの仕事を続けていくんでしょ。そんな弱気でどうするの。もう少しひとりでがんばりなさい」

千秋は書類を抱えたまま、応接間を通り過ぎた。

「この書類終わったら、話を聞くからー」

孝司は心底、困ったような顔をした。実際、すごく困っているのだろう。目の前の自殺志願者をどうやって思いとどませようか、言葉を選んでいるに違いない。

「まあ。葬儀はこちらでぜひともお願いします。それより、どうして死にたいんですか？」

言葉は選んでいなかった。孝司は単刀直入に私に訊ねた。今度は私の方が戸惑う番だった。受付を断られるかもしれないことは予想していたが、こうも真っ直ぐに訊ねられるとは思ってもいなかった。

「どうしてって。生きるのに、疲れたからです。詳しい事情は話したくありません」

取り付く島もないように私は言う。聞かれたくなかった。話したくなかった。孝司は沈黙した。私も沈黙する。

十分が過ぎた。

書類仕事を終えた千秋が、応接間に来て孝司の隣に座った。

「何？ 話しまとまったの？」

「いや、……」

「どうして黙ってるのよ、仮にも接客してるんでしょ。こういうときは関係ない話題でもいいからあなたからお客様に振らないと駄目でしょうが」

客の前で駄目出しをするのは、やめてあげてくれ。私は妻に頭の上がない孝司を見て悲しくなった。

「ごめんなさいね。気が利かない主人なもので。それより、どうして芹沢さんは自殺をお考えなのでしょうか？」

あ。似た者夫婦だ。

「それは話したくありません」

「ですよ。死にたい理由は人それぞれ。ましてやはじめて会った人にやすやすと言えるはずがないでしょうね。それでも、うちでお葬式をされるというのなら、お話は聞いておかないといけません」

「会社関係です」

「横領とか？」

「……違います。ただ働いても何も得られないことに、虚しくなっただけです」

「そんなことだけで、死ぬの？ 死にたいって思うの？」

「そうです。悪いですか？ 私はもう何もかもが嫌なんですよっ」

話しながら私はいら立ってきた。口調が荒くなる。しかし、千秋は冷静だった。

千秋が言う。もう面倒くさくて仕方がないというような口調である。

「じゃあ、もう、とりあえず、生前葬をやってみてから、死ぬかどうか決めてください」

これ以上関わってらんない、という心の声がひしひしと伝わる。私の頭も少し冷えた。

「いいですけど、生前葬だとなんというか、その、コントみたいになるのが嫌なんです。ほら、よくあるじゃないですか。お笑い番組で葬式のコント。あれ、笑いのハードルを下げてますよね。笑っちゃ駄目だってことで。私はそういうのは嫌ですねえ」

「だったら、あなたが死んでるってことにして本物の葬式っぽくしたらいいじゃない」

「できるんですか？」

「芹沢さん次第ですね。芹沢さんの死体演技によりますよ、成功するかどうかは」

なぜそうなる。しかし、本当の自分の葬式を生きたまま体験するというのは、おもしろいかもしれない。

私は、篠原葬儀屋に私の葬式を申し込んだ。

空井月乃が店の中を案内してくれた。店の中には棺桶がずらりと並んでおり、その他には祭壇や色とりどりの造花が並んでいた。

そして、一週間後。

通夜は省略して私の葬式が開かれた。私の両親はもう五年も前に二人とも事故で亡くなっている。私は一人っ子だったので、私の葬式の喪主は、誰になるのか。私は葬式が行われるまで知らなかった。ただおそらくは父方の兄弟かもしれないと思っていた。母方の兄弟は遠方に住んでいるからだ。棺桶の中で、わくわくしながら待った。自分で選んだ棺桶に入った私は死に化粧をして白装束を身にまとっていた。どこからどう見ても死んだ人である。

火葬場に行く前に、実は生きてました！ とネタばらしをする予定であった。私はコントのようになるのは嫌だったが、ドッキリは好きだった。棺桶は燃やさない。その為、私が選んだ棺桶は篠原葬儀屋で一番、値の張るものであり、最高級の素材を使っていた。前もって自分の墓を買っているように、前もって自分の棺桶を買っている人もいなくはないそうだが、それでも、普通、自分の葬式の棺桶は自分では選ぶことがないから、貴重な体験をしたと思う。

こつこつこつと足音がした。一人目の参列者の登場だ。とは言っても私にはそれが誰だかわからない。棺桶の窓のところへ来てはじめて誰が来てくれたのかがわかる。誰だろう。友達かな。数は少ないけれど、私にだって友達と呼べる人はいた。ときどきしながら薄眼を開けて待つ。瞼が震えないようにこの一週間、訓練してきた。というかこの一週間したことと言えばそれくらいだった。あと、遺書を書いたことくらいか。誰だろう誰だろうと私は期待していた。

しかしながら記念すべき一人目の参列者は、私をここまで追い詰めた部長だった。生前、散々私をいじめ倒して、次々と仕事を持ってきて押しつけてきた、鬼部長だった。

「せ、せりざわぁ。どうしてこんなことに」

あの鬼部長が目に涙を浮かべて棺桶の傍にいた。本当に悲しそうにしている。けれど、私は手放しでそれを喜べなかった。私が死んだことが悲しいのだろうか。本当に？ 普段あれほど私を罵倒しておいて、哀しいのか？ 自分が原因だとか思わないのか。まあ、いい。それはこの先の葬儀でのお楽しみだ。

次に現れた二番目の参列者は、私の部下だった奴だ。

「芹沢主任、なんで？」

なんで？ だと。しらじらしいにもほどがある。私はいつもおまえには愚痴っていたじゃないか。死にたいと言ったのは、一回ではなかったはずだ。どうせおまえは冗談だとしか受け取ってなかったんだろうが。私は本気だったんだ。しかし、本気だったはずの私は何故かこんな冗談みたいな事をしている。

その次の三番目の参列者に、ようやく私の友達が来た。

「……っ」

ただただ死体となった私にける言葉も見つからず、泣いている。ここにきてはじめて私は罪悪感というものを覚えた。もしかして、私はとんでもないことをやろうとしているのではないだろうか。

「ど、どうして。こんなに突然？ おまえと最後に交わした会話、覚えてるか？」

覚えてるさ。ちゃんと再現できる。

『すっげー。乳揺れてる』

『だよな。見た見た見た』

最期の会話は、ツイッター上だったな。しかも、夜中の映画の感想についてのリプライだ。正直、恥ずかしい。

「なんで、俺おまえにもっといつもありがとうとかそんなこと言ってなかったんだって、今になって後悔するよ」

しかし、急にそんなことを言われても困る。というよりも文脈的におかしくなるだろう。

『すっげー。乳揺れてる』『邦広。いつもありがとう』このようになる。

私もだんだんこの葬式を始めたことを後悔し始めているよ。

「ああ、次の挨拶の人が来たぞ」

そして次。四番目に現れたのは、私の憧れの女。

私の死に顔が見える所へ来ても、黙って涙をこぼしていた。友達とは比較にならないほどの、敢えて比較するのならば、蟻と象くらいの差がある罪悪感が私を苛む。

どうして黙って泣いているのだろう。彼女と私はさほど親しくない。私が一方的に憧れを抱いているだけだ。

このときまでは、そう思っていた。

彼女は最後の参列者が来るまで棺桶の傍で泣いていた。薄眼を開けてみたその顔は泣き顔とて、美しかった。次の参列者に場所を代わろうかというとき、彼女は鼻声でぼそっと言った。

「……すきだったのに」

私は危うく、コントっぽくその場で生きていることをばらしてしまいそうになった。一週間の訓練も、彼女のこの言葉には太刀打ちできなかった。全身が喜びで震えた。幸い、彼女と次の参列者が入れ替わっている間だったので、ばれはしなかったが。

喜びもつかの間、五番目の最後の参列者は、私が死にたいと思う原因、元凶、理由、引き金、根拠、事由、所以である人間。

取引先の安久部長だった。

「君にしなれちゃ、困るんだがね」

そりゃそうだろう。

私は、さきほどとは逆に怒りで身体が震えそうになったのを辛うじてこらえた。

「まったく。最近の若いもんは、どうしてこうすぐに死んでしまうんだ。わしらが若い頃は、もっとぼろくそに言われたもんだ。戦時中の憲兵上がりの上司がたくさんいたしな。おまえなんか絶対に幸せになれないとか、ひどい暴言もあったがな。いや、それほどひどくは無いか。わしもおまえに言ったっけ？」

つまり、私が死んだことは、私が弱いからって言いたいのか。

自分が言ったことは、棚に上げて？

ふざけるな。

限界だった。私は、死体を辞める決心をした。一言でいい。言い返さないと気が済まない。このまま死んでたまるか。このまま何も言わず、泣き寝入りして死ぬことなどとてもじゃないがで

きない。

「それでは、喪主よりごあいさつがあります」

丁度私がぱちりと目を開けた時、空井月乃が葬式の進行をしていた。そういえば、彼女は今日がはじめての司会役と言っていた。私は起き上がって棺桶の窓を突き破りたい衝動を寸でのところで抑えた。今日まで冗談としか思えないような生きたまま本当の葬式をするという私につきあってくれたのは、篠原夫婦と空井月乃だった。

「喪主の芹沢和義です。邦広君の伯父になります。突然の訃報を聞いて驚いています。邦広君の両親、つまり私の弟と義妹が無くなったのはつい五年前です。まるで後を追うように邦広君まで……。本当に、優しくていい子でした。それに意志の強い子でした。自分で決めたことは何でも貫き通すような。七年前。弟が亡くなる二年前です。邦広君は大学を出て契約社員で働きはじめました。本当は正社員になりたかったそうですが、不況で枠がなかったようです。がんばってがんばって邦広君が二年かかって正社員になった頃、彼の両親はこの世を去りました。独り暮らしの準備を始めた矢先の、事故でした。大変な衝撃を受けたと思います。弟の葬式のとき、彼は立派に喪主を務めていました。涙も見せずに。本当は泣きたかったに違いありません。なにしろ、邦広君は幼いころ、ものすごく泣き虫でしたから……。っ」

和義伯父さんが泣いていた。伯父さんの涙を見るのは、これが三回目だった。一度目は両親の葬式の時。二度目は伯父さんの娘の結婚式の時。そして、今日が三回目。

「本当にっ、私たちがもっと近くで声をかけていれば、と悔やんでも悔やみきれません」
伯父さんは泣き崩れた。

ああ。私はずっと両親が死んで、兄弟もいなくて、親戚づきあいも近所づきあいも会社の人間関係も疎遠で、煩わしいものだとしか思っていなかったのに。ずっと、ひとりぼっちで自分の事を見てくれるもの好きな人間なんているはずないと思っていたのに。それなのに。

軽い気持ちから始めた葬式だったが、今は罪悪感で胸が押しつぶされそうだった。

泣き崩れた伯父さんは私が書いた遺書を持っていた。私が葬儀屋に預けていたものだ。

「えー。それでは生前、故人の芹沢邦広が書き遺した遺書を読みあげます。本人たつての遺志で葬式で読みあげてくれと書いてありました」

うげ。と、止めたい。今ならば、たぶんもっと違うことを書けるのに。

私は、今度こそ棺桶の窓に頭をぶつけそうになった。しかし、やはり火葬場までは我慢だ。ここで立ち上がると段取りがめちゃくちゃになってしまう。棺桶の中で葛藤しつつ耐える。

「『今日は、私のお葬式にお集まり頂きましてまことにありがとうございます。私は芹沢邦広です。私のお葬式なので言わなくてもわかるかと思いますが。それで、私は私のお葬式に来るかもしれない人に、遺言があります。』

私の両親はあの世からきっと、来る来るなどと言っていると思います。私の事をとても大切に育ててくれた二人ですから。天国にいるのか地獄にいるのかはわかりません。何せ、両親の不注意

が原因の事故ですから、普段いい人だったとしても天国にいるとは限らないです。蚊も殺さないような人が蚊も殺さないとは限りません。両親は意図しないこととはいえ何人も人を殺してしまっているのです。その負債は、賠償金は私が相続しました。もちろん、相続放棄だってできました。簡単です。両親の罪は私の罪ではないのですから。

最初は、真っ当に働いて支払っていこうと考えていました。何年何十年かかったとしても私が支払っていくべきだと。しかし、その考えが甘かったことに私は気付かされました。遺族です。私の両親が起こした事故によって亡くなった人の遺族。彼らは私に憎しみをぶつけてきました。当然です。仇の息子です。憎くないはずがありません。

私は両親が事故を起こした時、会社の近くの不動産屋にいました。これから手ごろな物件を案内してもらおうかというときに、私の携帯が鳴りました。私は無視しました。非通知でかかってきた電話はいつも無視することにしているのです。そうして私は手ごろな物件を紹介してもらいました。部屋を見るのはとても楽しかったです。はじめてのひとり暮らしです。部屋を回っている間、とてもわくわくしていたのをよく覚えています。しかし、その間も何度も何度も携帯は鳴りました。マナーモードにしていたけれど、さすがに気になります。3件目の物件を回っている時、十回目の着信がありました。私は、ようやく緊急の用事であると気付き、携帯電話に出ました。物件を回り終わるまで、でなければ良かったと思いました。でなければ少なくとも私は、楽しく物件を見学し終えることができたのに。

電話は警察からでした。即死だったと聞かされて、私は苦しまなくて良かったと思いました。それから事故の原因はまだわからないと聞いて私はまさか両親であるはずがないと思っていたのです。それが、現場検証と解剖が終わってから父の不注意が原因だったと聞かされて私は茫然としました。それでも、お葬式は開かなければなりません。ニュースで全国に放送されている中の葬式でした。ニュースを見た人の非難の声が聞こえたような気がしていました。

両親は苦しまずに死にました。ですが、両親が反対車線にはみ出したことで起こった玉突き事故では、生きたまま焼かれて死んだ人もいたはずですよ。それは想像を絶するくらいの恐怖があったと思います。私の両親のせいで。だから私は相続放棄ができませんでした。私がつたえどんなことをしてでも返していかなければならないとおもったのです。

ですが、連鎖的な玉突き事故に寄って死傷者は十名にも及んでいました。賠償金はもちろん保険に入っていたのですが、支払いきれません。

そこで、私は会社のお金を横領していました。横領してしまいました。許されないことだとはわかっていました。迷惑をかけることも。ですが、一億円横領しても誰も気がつかないのです。そのとき、気がつきました。真面目に仕事をしていたのは、私だけだと。それまで嫌に忙しかった理由がわかりました。同僚も上司も部下も定時で早々に仕事を切り上げて帰っていたというのに、私は残業をしていました。みなさん、書類の内容も見ないくらいに適当だったんですね。特に鬼部長。私の決済の内容もろくに見ずに判子を押してくれました。こればかりは、感謝しなければなりませんね。ですが、いずれ悪いことには終わりが来ます。今からおよそ半年前のことです。新しい取引先の方と会合がありました。そして、ついうっかり私は無意識のうちに安久部長に横領の証拠を握られてしまったのです。もう五年も前の事故の事を安久部長は知っていま

した。そして、私がちゃんと賠償金を支払っていることもなぜか知っていたのです。

取引先の安久部長も同じことをしていたようです。ただその尻尾は掴めませんでした。私のやっていることと似た方法だったのでしょう。そして安久部長は私を脅し始めました。

結果として私はこれを苦に自殺したのです。もちろん、会社の仕事が大変だったことも、横領できるくらいに私だけがひとり残って残業していたことも、両親の事故による遺族からの誹謗中傷や嫌がらせも、要因のひとつではあります。

ですが、きっかけは、私が死にたいと思ったきっかけは安久部長の脅迫です。

この手紙を書く前に、その時の音声を録音したものは複数の動画サイトにアップしました。そしてそのアドレスを私の会社の全社員に向けて、私が知っているあなたの会社の社員のアドレスに向けて一斉に送信をしました』以上です」

和義伯父さんが私の遺書を読み終えた。

取引先の部長はそれまでとは打って変わった表情をしているに違いないと私は棺桶の中で想像した。私がもう死んだものと思って安心しているところもあったはずだ。それが今はどうだろうか。真っ青になっているに違いない。ただ六十の定年目の安久部長が音声を動画サイトにアップロードしたことの意味を知るのは、まだ先の事だろうと思った。

「それでは、火葬場へと移動します。ご案内いたします」

空井が騒然となった場を収めるように仕切りなおした。

棺桶は霊柩車に乗り、参列者はバスで火葬場へと向かう。私は棺桶の中で盛大に車酔いした。

吐き気を抑えつつ、ようやく火葬場に到着した。これからいよいよ燃やされるというところで私は普段の私で登場する予定だった。しかし、私は致命的なミスを犯していた。

私はあまりにも死体然としすぎてしまっていたらしい。あまりにも死体らしくなりすぎていたらしい。本物と間違えられた。棺桶に花が詰められ、私の好きだった納豆が詰められた。花の甘い匂いと納豆の納豆臭いに匂いが混じり合ってもものすごい臭いになる。それに気を取られていて、視界が真っ暗になっても私は気付けなかった。視界が真っ暗なままだこかへと運ばれていく。

本来ならもうそろそろ棺桶の外から、「最後の挨拶をしましょう」という空井の声が聞こえてくるはずだった。その合図が聞こえたら、私は棺桶から起き上がって、

「実は生きてました。すみません」と言う予定だった。

しかし、いつまで経っても空井の合図が聞こえない。それどころか物音ひとつ聞こえない。棺桶の周りに人の気配がない。これってやばくね？

汗がだらだらと流れてくる。確実に気温が、棺桶内の温度が上がっていた。

そして、棺桶の周りから焦げくさい臭いがした。

生きたまま棺桶を焼かれる？ 私はパニックに陥った。棺桶の内側からどンドンと内壁を叩くのだが、気付いてくれない。仮に気がついた人がいたとしても、棺桶に入っているのは通常は死体なのだ。棺桶の中から音がしたところで気のせいだと思うに違いない。そうでなくても、私のこの完璧な死体姿を見たら、動いていても生きている人間だとは信じてもらえないだろう。一度死んだ人間が動き出したら、怖すぎる。

私は、はじめて死を覚悟した。

遺言を書いた時、私はこれほどの覚悟などなかった。ただ生きていることが、生きているために起こっている問題が嫌なだけ、それから逃げたいためだけに死にたいと思った。本当に、自分が死ぬなんて考えてなかった。自分が死ぬのはそのうちの遠い将来のいつかだと、そうでなくても、自分で死ぬ時くらい選べるものだと思っていた。葬式をして、私は私の浅はかさに気がついた。それとこれまで気付かなかった大切なことにも気がついた。

生きているうちに気がつけて本当に良かったと思っている。たとえこの命がもうすぐ終わるとしてもそれでも気付かないまま死んでしまうより、気付かないまま生きていくより、ずっと良かった。

私は目をつむった。どンドン煙が棺桶に入ってくるのがわかる。だんだんと意識が遠くなる。視界がブラックアウトする。私は失神したようだ。

「ドッキリ、大成功！」

というプレートを持った空井月乃がいたずらっぽく笑って、そう言った。

「え？」

「焼くわけないでしょう。ちょっとしたいたずらですよ」

「だって燃えて。煙が。え？」

私は混乱して上手く訊ねられなかった。しかし空井は聞きたいことがわかったようだ。

「焦げくさい臭いは、予め真っ黒に焼いておいたシシャモ。煙はドライアイスです」

「な、なんでそんな手の込んだことを？」

「このお葬式が始まったときは、最初の打ち合わせ通りにしようと思ってたんですよ。でも、参列者の皆さんを見て、ここはひとつ、芹沢さんに罰を与えなきゃって思っちゃったんですよ。あれだけ、みんなに愛されてるのに、気に掛けられているのに気がつかないで生きているのに葬式をしちゃったりなんかして。それと、遺言に書いてあったこと。私ちょっと預かってる間に読んじゃって。あの事故について詳しく調べたんですけど、生きたまま焼け死んだ人はいなかったみたいですよ。煙を吸いこんじゃって一酸化炭素中毒で死んでしまったようです。だから、苦しめて死なせてしまったなんて、自分を責めることなんてないんですよ。ほら、みなさん待っています。これからは打ち合わせ通りに行きますよ」

ひ、人の傷口を抉るようなことをするなあ。でも、ちゃんと調べてくれたのか。

「はい……。着替えてきます」

そして私は、白装束から私服に着替えた。びくびくしながらも、火葬場の前で待っている、参列者のもとへと向かう。みんな今現在、私が焼かれているのを待っている。そんなところへ私が現れたら、どういう反応をするのだろうか。従兄弟などは腰を抜かしてしまうのではないか。ホラー映画のCMだけでトイレに行けなくなると言っていたような気がする。ゾンビだと思って逃げ出すかもしれない。少し楽しくなった。

銀色の耐熱耐火扉がゆっくりと開く。お骨を拾う箸を持って、スタンバイをしている姿が少しずつ見えてきた。私は手に持ったラジカセのスイッチを押した。この場にふさわしいBGMが流れ始める。

ぶっ生き返す～と一番が終わったところで、完全に扉が開いた。

みんな啞然とした表情でこちらを見ていた。口が半開きだった。

「すっ、すみませんでしたあああっ！」

私はラジカセを床に置くと、飛び込むような勢いで土下座をした。

謝罪

「本当にごめんなさい。騙そうと思ってやったわけじゃないんです。結果的に思い切り騙してしまっただけ。でも、悪意のある葬式じゃない。これだけはわかってほしいんです。本当に申し訳ありませんでした！」

当然、伯父さんや伯母さんからはものすごく怒られた。だが、そのあと抱きしめられた。会社の上司や部下たちは軽蔑するような目で私を見ていた。辞表を出すつもりだった。取引先の部長は、慌てふためいた様子でうろたえていた。悪事をばらされたのだから。友人たちは嬉しそうに泣き、それから騙されたと怒った。気の置けない友人たちだ。私の憧れの人は、それはそれは綺麗な笑顔で微笑んでくれた。お付き合いがしたい。そして空井が取り仕切る。

「申し遅れましたことをお詫びします。申し訳ありません。では、ここからは生前葬になります。故人を囲んでのお食事へ行きましょう」

なごやかな食事になるわけがなかったが、それでもこれまで食べたどんな食事よりもおいしかった気がした。死にかけて、生きているということを実感できた。

結局私は中途半端な形で葬儀を終えた。

私を取り巻く状況は変わらない。それどころかむしろ職を失って悪くなってさえいる。けれども、私の心は、ちゃんと変わった。篠原葬儀屋と空井月乃の思うつぼなのが少し悔しいけれど、でもそれ以上にものすごく感謝をしている。

葬式が終わって、三人から訊ねられた事がある。

「今でも、まだ、死ぬ気があるのかな？」

「死にたいって本気の本気で思ってる？」

「目を見ればわかるが、変わっただろ？」

私は、私が変わったことを伝えた。

そして、篠原孝司が私に言う。

「今回の料金は、ちゃんとした五十年以上先の葬式の前金ってことにしておくよ。もちろんキャンセルもできないし、前倒しなんてもっとできないからな。次の葬式は、私たちの子どもか孫に担当させよう。もちろん、空井さんにもサポートは頼むけど」

「私たちは、もうあなたのお葬式はしませんからね。だから、私たちが生きている間に死んだら駄目ですよ」

篠原千秋が夫に続けて言う。私は可笑しくなって嘔き出した。

「葬儀屋なのに？」

「たまには採算度外視も良いんですよ」と空井月乃が微笑む。

「それで、未来の顧客がひとり増えるのなら、安い投資ですよ。今の一万円と未来の一万円じゃあ、今の一万円の方が価値があるんだし」

「とにかく、先払いしたんだから、あと五十年後にちゃんとうちでお葬式やってよね」

それから三人は声を揃えて、言った。

「「五十年後、もしくはそれよりもっと後のご来店をお待ちしております」」

「はい。よろしく願います」

私は晴れやかな笑顔で言った。

私は家路につきながら、さきほど言った言葉を反芻する。

「横領したこと言っちゃったし、辞表も部長に出してきちゃいました。一文無しどころかマイナスからの再スタートです。遺族への賠償金と横領のお金を払わないといけません。もしかしたら、横領の罪で刑務所に行かなくちゃならないかもしれない。でも、それでも私は、死ねません。死にません。生きる希望を見つけたんです。このお葬式で。たくさんの希望を見つけてしまった。だから、私は生きます。

これからのことを考えると問題が山積みです。でも、ひとつずつひとつずつ解決していこうと思います。五十年もあればなんとかなると思います。今すぐにじゃなくていいってわかりました。ゆっくりと歩いていけばいいって。

本当にありがとうございました。

棺桶に入っているとき、私は決心しました。絶対に幸せになってやると。安久部長が言ってたんです。私は幸せになれないと。棺桶の中でその言葉を聞いた時、今までにないくらいの怒りが込み上がってきたんです。安久部長に対してではありません。私に対してです。自分自身に腹が立ちました。私は幸せになれない。いつからか言われるまでもなく、私はそう思っていたのです。何の疑いもなくそう思い込んでいたのです。

でも、これからは違います。努力します。幸せになる為の努力を、寝る暇だって惜しまない。何が何でも、がむしゃらに、私は生きようと決心しました」

この思いを忘れずに記しておこうと思い、家に着いてペンを握った。

電話

あれから六十年が経った。

私は郊外の病院に入院している。

肺がんで余命が幾ばくもない私は五十年前に書いた日記を妻に頼んで、持ってきてもらっていた。さきほど、読み終えたところだった。私は最後のページにメモしてあった葬儀屋の電話番号に携帯から電話をかけた。幸い壊れるような医療機器のない個室に入っていたので携帯を使うことができた。ぷるるる、と呼び出し音が鳴る。三コール目で受話器が持ちあげられた。

『はい、こちら篠原葬儀屋です。担当の空井月乃と申します。お電話ありがとうございます』

「もしもし、あの、お葬式の予約を取りたいんですが」

『……』

あとがき。蛇足。

楽しい話のはずが暗かったり。最初は「黒笑」小説を書こうと思ったのにいつの間にか「暗笑」の小説になっていたり。

拙作をお読みいただきほんとにありがとうございました。

以下、蛇足と思って切った落ちです。落ちてない？ 結局載せてしまう。

「えっ？ 空井さん？ まだ働いていたのかい？」

『その声は、もしかして、もしかすると芹沢さん?!』

「覚えててくれたんですね」

『もちろん。大切なお客様ですから。まだ働いていたって、私は生涯現役ですよ』

「生涯現役、か。うらやましいよ」

『お電話を頂いたということは、』

「そう。お葬式の予約をしたいんですが」

『今度は、本当のお葬式ですね。どうされたんですか』

「肺を患ってしまってね。もう一ヶ月もつかどうかというところなんだ」

『それは、お気の毒に。私の友人も、みんな私をのこして次々と逝ってしまうんです』

「もう九十に近い年齢だからね。仕方がないよ。むしろこれまで生きてこれたことが奇跡だ。でも、空井さんにはぜひ寿命まで生きてほしいよ。素敵な旦那さんが天国で待っているとしてもね」

『素敵だなんてとんでもない。もう十年以上待たせてますからね。あともう少くらい待っててくれると思いますよ？ 芹沢さんこそ素敵な奥様がいて見送ってもらえるんですね』

「ああ。毎日見舞いに来てくれるよ。家から遠い病院なのにな」

『良い奥さんですね』

「私にはもったいないよ。本当に。彼女がいなければ、今日の私はいない。あの葬式に彼女が来てくれてなかったら、私は立ち直りこそすれど、今の私ほど幸せではなかつたらうね」

『この歳になってのろけを聞かされるとはっ』

「いやいや、のろけてなどいないよ。事実なんだ。彼女がいたから、賠償金も横領したお金もすべて返済することができたんだ。三人の子供と六人の孫に恵まれた」

『幸せなお爺さんになっちゃって、もう。ご冥福をお祈りしますよ』

「ちょっ、まだ死んでないって。それで、本題なんだが……」

『どちらに入院されてますか？ 私、打ち合わせに行きますよ。奥様もご一緒に。人生最期の式ですから、張り切っていきましょ』

「そうですね、ありがとう」

私の棺桶

<http://p.booklog.jp/book/35611>

著者：都 恵司

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/123miki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35611>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35611>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.